

## 巡礼が残した至宝

村越 信子

The Greatest the Pilgrims have left

Nobuko MURAKOSHI

### はじめに

「カミーノ・デ・サンチャゴ (Camino de Santiago)」という魅力的な言葉に引かれて調査が始まった。カミーノとは道の意味で、フランスからスペイン北西部の地の果て“サンチャゴ・デ・コンポステーラ”への数千キロもの長大な巡礼路である。キリスト教三大聖地の一つであり、世界遺産に登録されていることを知った。世界遺産という過去の遺物に止まらず、現代の人々に引き継がれ、今も盛んにこのカミーノ・デ・サンチャゴを大きなザックを背にした巡礼者たちが、炎天下を苦しめず元気に歩き続けている。

9世紀の初め、このガリシア地方でキリストの12人の使徒の一人聖ヤコブ（サンチャゴ）の墓が発見されたことにより、多くの巡礼者たちがこの聖地を目指すようになった。これがカミーノ・デ・サンチャゴである。このヤコブ信仰は、スペイン全土のキリスト教徒の間に広まり、イベリア半島のイスラム勢力に対するレコンキスタ（国土回復運動）の精神的な支柱となった。聖ヤコブの墓は当時キリスト教最後の拠点となった歴史もある。

11世紀に入ってから、聖地も巡礼路も整備され、救護所、宿場などができ巡礼者たちを迎えた。ヤコブ信仰は、特に聖遺物崇拝（聖人の骨や衣服など遺品を崇拝する）が盛んに行われたので、それらを保管するための教会や聖堂の建築ブームを引き起こし、この巡礼路はロマネスク芸術の伝播に重要な役割を果たすことになった。

現在、このカミーノ・デ・サンチャゴを歩く巡礼者たちは、宗教的動機で長い道のりを旅する者、精神的なものを求めて歩く人々、ロマネスク芸術探索の人々、スポーツ感覚で旅する人々など各自各様の目的を持っていると考えられる。子供連れのファミリー巡礼の姿にも出会った。異なる言語、個々の日程の違い、体力の違いなどがあっても、聖地サンチャゴ・デ・コンポステーラを目指すという同じ目的意識を持った、強いつながりで一緒に旅を続けている。そして、この旅で各々が大きな成果を獲得して、日常の生活に戻って行くのであろう。

中世の人々が、どれほど神を身近かに感じていたのか、信仰心の厚さが、どれほどのものだったかは分からない。しかし、聖遺物の近くに身をおき、神や聖人の遺徳に包み込まれていたいと願っていたのだ。それはきっと死への恐怖が大きかったためであろうし、生きる苦悩に満ち

た現実から逃げ出すためには、巡礼という認知された理由が欲しかったことであろう。その願望が強烈だったからこそ、遙かな地の果てまでも歩き出させたのだ。この巡礼者たちは、王侯貴族から商人、遊芸人、農民など様々な身分の人々であった。そうした人々の中には、二度と故郷の土を踏めないと覚悟したり、聖地への途中で生涯を終えるかもしれないと考え、全財産を教会に差し出して出発した者も多かったと伝えられている。また、このカミーノ・デ・サンチャゴは、犯罪者の罪の償いのために、この巡礼路を歩かせるという利用の仕方もあったようだ。

パリ市内を横切る東西と南北の大通りが交わるシャトレ広場に、優美でこまやかな装飾が施されたゴシック様式のサン・ジャック塔（聖ヤコブ塔）と呼ばれる塔が建っている。その昔、サン・ジャック・ラ・ブーシェリー（肉屋の聖ヤコブ）教会の名残の塔であり、この教会こそがパリにおける巡礼の起点であった。

英国、フランドル、その先の北海沿岸諸国や、イル・ド・フランスの巡礼者たちがサン・ジャック・ラ・ブーシェリー教会でミサにあずかり、巡礼杖などに祝福を受け、遙かに遠いサンチャゴ・デ・コンポステーラを目指して南へと旅立って行ったところである。サン・ジャック塔からおよそ2,000キロという長い道のりが始まるのである。その道中の間には、フランスとスペイン国境にまたがる険しいピレネー山脈を越えねばならない。今のような道路事情ではなく、幾多の困難を乗り越えて、巡礼者たちは、陽が西に傾く頃やとゴリーという丘に着く。その丘の上から遙か遠くにサンチャゴ・デ・コンポステーラ大聖堂を初めて視野におさめることができる。国境からでも900キロ、待ちに待った聖地にたどり着いたのである。巡礼者たちは、大聖堂の東側の「聖門（栄光の門）」から堂内に入ったそうだ。その感激は天国への扉を押開く興奮を味わっていたことだろう。

何世紀もの間に膨大な数の巡礼者たちが歩んだこのルート上に、成り立っている様々なことがら、中世の波乱の歴史を物語っている。

今回、路傍のカルヴェール（後述）＝カルヴァリオ（後述）の調査研究の目的で、カミーノ・デ・サンチャゴを辿る機会を得たが、道沿いには、多くの聖堂や教会、礼拝堂、修道院などが建設されていた。それらの施設は、かつて救護所や宿泊の目的に使われていた。その土地の支配者により道路や橋が造られ、そこを中心に都市文化が築かれていたのである。特にカミーノ・デ・サンチャゴは、前述のように聖遺物崇拝が盛んであり、それらを保管するための教会や聖堂の建築をはじめ、ロマネスク芸術が随所に見られる。このルートを歩くとこれらのロマネスク芸術に触れる機会が多い。

この巡礼路は、いろいろな顔を持った一つの社会を築き上げてきた。11世紀には年間50万人以上の人々が往来し、今日でも若者たちや中高年の人々が往時と変わらぬ巡礼路を歩き続けている。この巡礼路ぞいに存在する様々なものから生活文化に関連するものを「巡礼が残した至宝」として、項目別に取りまとめた。

(1) 道…道標、カルヴェール=カルヴァリオ

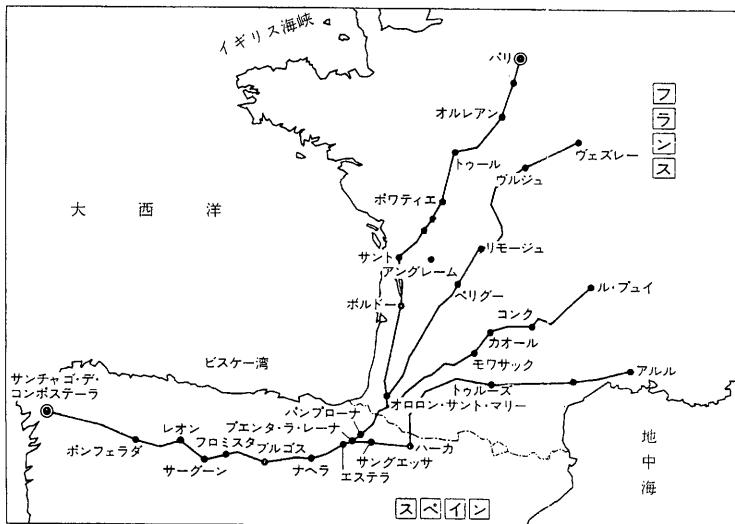
イベリア半島北西部に位置する町サンチャゴ・デ・コンポステーラは、ローマ、エルサレムと並ぶキリスト教の三大聖地の一つである。中世の頃ヨーロッパ各地から、この聖地サンチャゴ・デ・コンポステーラを目指して数千キロにも及ぶ巡礼の道が延びていった。

『サンチャゴ・デ・コンポステーラ巡礼案内』という12世紀中頃に出版された本に、フランスからサンチャゴ・デ・コンポステーラに行くには四つのルートがあるとすでに記載されている。現在サンチャゴ・デ・コンポステーラ大聖堂の古文書室に保管されている『聖ヤコブの書』の五巻目がその案内書である。

- ①南フランスのアールを出発してトゥールーズを経てピレネー山脈のソンプルト峠を越える“トゥールーズの道”
- ②オーヴェルニュ地域のル・ピュイからコンク、モアサックを経てピレネー山脈をイバニェタ峠を越える“ル・ピュイの道”
- ③ブルゴーニュ地域のヴェズレーからリモージュ、ペリグーを経てイバニェタ峠へ通じる“リモージュの道”
- ④北のルートでパリからトゥール、ボルドーを経てイバニェタ峠へと至る“トゥールの道”の4ルートである。

この二つの峠を越えて、スペイン領のハカヤパンプローナを通過してペンテ・ラ・レイナで合流し一つの道に統合されて、エステーリャ、ブルゴス、レオン、トリアカステラなどを経て聖地サンチャゴ・デ・コンポステーラに到着するのである（地図1）。

巡礼者は一日どれほどの距離を歩いたのだろうか。勿論中世の人々の忍耐力や体力を過小評価してはいけないが、中世の記録によれば一日ほぼ30～40キロ歩いたそうである。巡礼という



地図1 サンチャゴ巡礼路と主な巡礼地  
(ヨーロッパ古寺巡礼・平凡社より転写)

行為は、頑丈な体格をもった人々だけのする行為ではなく、老人、体力の弱った者も、癒しを願う病人までも、皆一緒になって道を辿ったと考えられる。当然のことながら、この道には多くの危険が存在し、強奪や殺傷、追い剥ぎ、強盗などが出たことだろう。さらに精神的孤独も絶えずつきまとい、いつも危険に怯えた道中であったと考えられる。そのようなストレスの多い道中は、精力を萎えさせ、心身を痛めつけ、疲労をつのらせることであった。その上、数千キロという長い道のりを歩くのであるから、いかに己に苦行を強いたことだろう。

苦しい道中であっては、さわやかな天候の日や、鳥の声や、遠くで鳴る鐘の音でさえ慰めとなったことだろう。しかしながら中世という時代は、おおらかさもあったようだ。時には道端でおしゃべりをし、冗談を言い合い、笑い声も聞こえただろう。沼や川があれば、飛び込んで水浴びを楽しむこともできた。

数千キロの長い道のりを目的地サンチャゴ・デ・コンポステーラまで、道に迷ったり遠廻りすることなく、安全に到着できるようにと願って、道端に設置された巡礼炉道標、カルヴェール（仏語）＝カルヴァリオ（西語）などがある（写真1～9）。

フランスの4ルートの巡礼路の沿道には、特に数多くのカルヴェールが設置されていた。ミディ・ピレネー地域では、立派な石製の台座に精巧な細工を施した鉄製のカルヴェールが随所に設置されていた。中央山地では、古びた素朴なキリスト像の風化した石製のカルヴェールが荒野の一角に立っているのに出会った。その台座に巡礼者たちが供えた小石が積み上げられ、これは登山道にあるケルンを連想させられるものである。また、この地域にも鉄製のものが、分岐や峠道に設置されていた。パリからのメインルートには、巨大な木製のものから、精巧な細工の鉄製のもの、古びた巨大な石製のものなど各種のカルヴェールが数多く設置されていた。スペイン国内の巡礼路に入ると、石製のカルヴァリオが主流となり、支柱に巡礼姿のヤコブ像が彫られているものが多く、台座には巡礼のシンボルマークである帆立貝や瓢箪が彫られていた（写真10～18）。また、道路沿いに立っている距離標識にも帆立貝のマークが彫られていた。現在の道路標識にもシンボルマークがデフォルメされ、濃紺の地に鮮やかな黄色の“帆立貝マーク”が多用されていて、巡礼者の横断に注意などの道路標識も随所に立っていた。

都市の中心や町角にも、町を通過するための案内標識として、道路の上に、建物の外壁にも帆立貝マークが彫り込まれていた。また、交差点の一角にも、濃紺の標識が設置されているのも見かけた。巡礼姿の聖ヤコブの巨大な像が立って、霧の濃い険しい山越えルートで巡礼者たちを導いていたのが印象的であった（写真19～25）。

## （2）巡礼路に生れた町・橋

ヨーロッパをはじめ世界各国からやって来た巡礼者たちは、文化の伝播のみならず町の発展に大きな役割を果たした。かつては辺境の地であったスペインの北部に新しい風が巡礼者とともに吹き込んで、町を繁栄させ、また新しい町が誕生した。一例を挙げると、サント・ドミンゴ・デ・ラ・カルサダである。11世紀の僧侶、ドミンゴは巡礼者たちが歩きやすいように、こ

巡礼が残した至宝

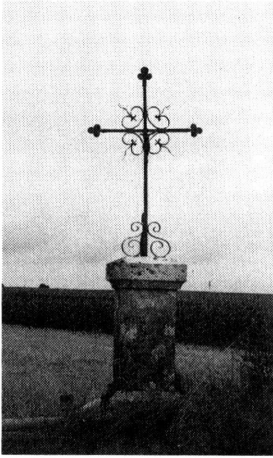


写真1



写真2

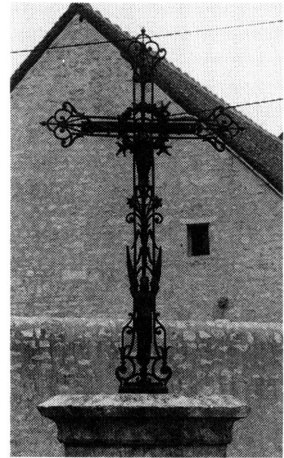


写真3



写真4

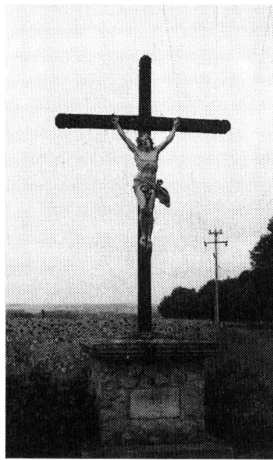


写真5

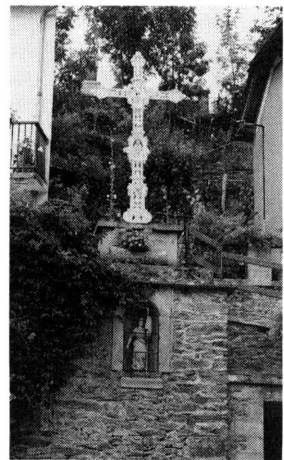


写真6

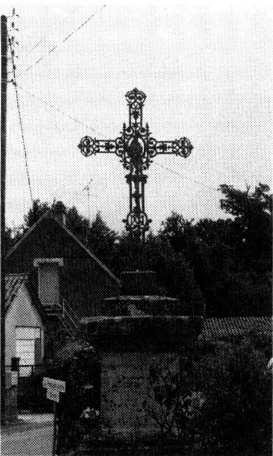


写真7

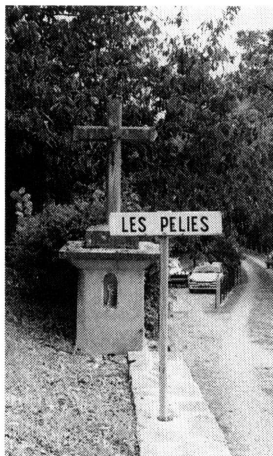


写真8

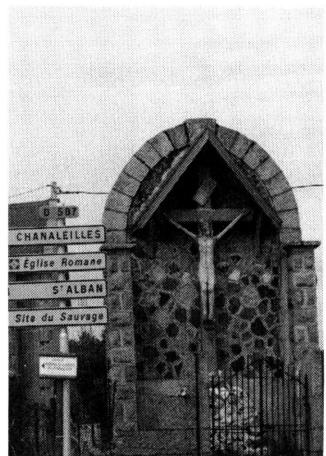


写真9

〈フランス国内〉

村越 信子



写真10



写真11

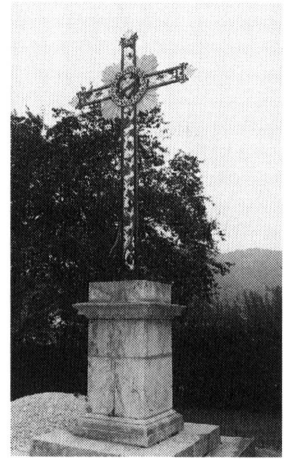


写真12



写真13

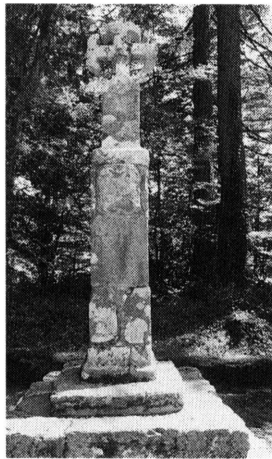


写真14

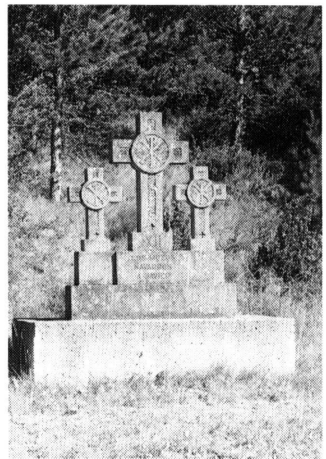


写真15



写真16



写真17

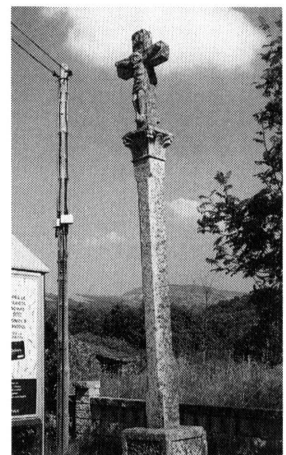


写真18

〈スペイン国内〉

巡礼が残した至宝



写真19



写真20



写真21



写真22



写真23



写真24



写真25

の地に石畳の道（カルサダ）や宿泊施設、救護所を造ったという。彼は巡礼者のためにその生涯を捧げたのである。そして彼が亡くなると聖人位が授けられて、その遺体を納めるために聖堂が建てられた。それがこの町の始まりである。聖堂の隣にあるドミンゴが建てた救護所は、今はパラドール（国営ホテル）として多くの人々が利用しているが、あいにく巡礼者たちの泊まれる料金ではない。

中世には、交通の要となった建造物に「橋」がある。これらは信仰心から発した一種の慈善事業として作られたものである（写真26～29）。

フランスの巡礼路に残る古い橋は、ポー川に架かるオルテーズ橋、オロロン川のリーヴテール橋、この中間にはロピタル・ドリオンという救護所が建設されている。さらに山地に入るとアジャン川やモントーバン川に架かる橋、トゥールーズの橋、それにロット川に架かるカオール橋などがある。このカオール橋は“ヴァラントレ橋”という愛称があり、三つの太く高い方形の防護用の塔がそびえ立っている。14世紀以来、中央高原地帯の険しい道を辿ってきた、多くの巡礼者たちの踏み鳴らす靴音が、これらの石橋の上でいつも反響していたことだろう。

荒涼としたオーブラック付近の村や町にも橋が架かり、各地方からの巡礼者たちの流れを一つにまとめる役割を果たし、この荒れ果てた長い道りを迂回せずに済んだのである。これらはゴシック期以前のものではないが、どれも豊かな量感をたたえ、尖頭アーチ形がすらりと伸

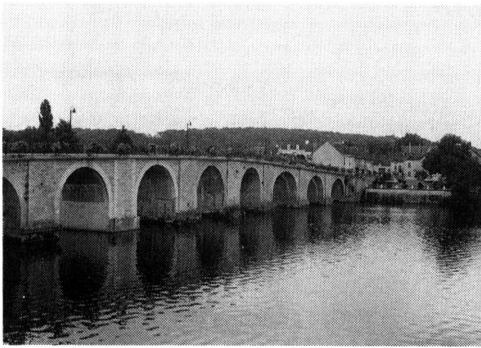


写真26

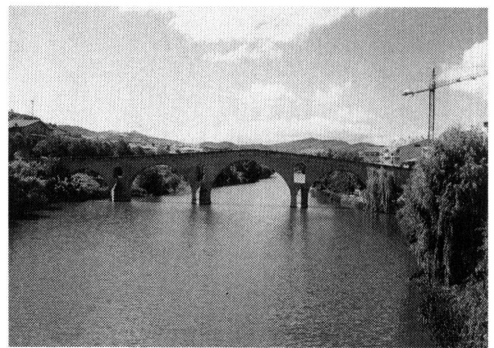


写真27



写真28

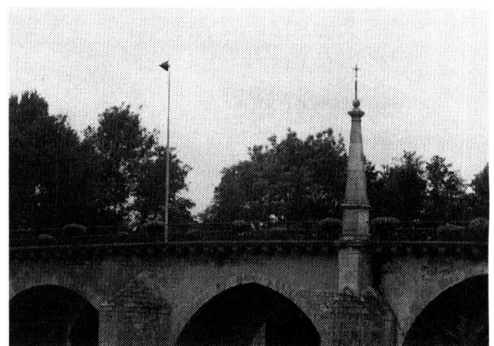


写真29



び優美さが漂っている。

イバニエタ峠を越えてスペインに入るとロンセスバジェスから来た道と、ソソポルト峠を越えハカ経由の道がプエンテ・ラ・レイナの町で合流し一本に統合される。この合流点に巡礼者の像が立っていて、その台座に「ここからサンチャゴへのすべての道はただ一本になる」と刻まれている。町の中心を真直ぐカジェ・マジョール大通りを抜けると石造りの橋に行き当たる。この橋が「プエンテ・ラ・レイナ橋（女王の橋）」である。川幅の広いアルガ川の上にゆるやかな弧を描き、五つの半円形のアーチが力強く橋台に支えられている。同じく半円形の小窓もついている。11世紀、この地を治めるナバーラの王妃が巡礼者たちのために架けたもので、その名で呼ばれて親しまれてきた。それまではアルガ川を渡るために大きく迂回をしなければならなかった巡礼者たちが、この橋ができたことで、幾分でも楽になったことであろう。

12世紀初め、信仰の厚いドミンゴが、人々の協力を得てナヘラとブルゴスの間のヒエラ川に橋を架けた。アストルガに向かうオスピタル・デ・オルビーゴの長い橋もある。

聖地まであと250キロというボンフェラーダの近くにあるモリセカ村へは、アーチ橋を渡って入る。巡礼者たちが聖地サンチャゴに着く前、川でみそぎの沐浴をしていたという話である。

このように各地の巡礼者たちのために架けられた、多くの橋が今でも風景に彩りを添え、人々にとっても大いに便利さを与えている。

### （3）衣裳

巡礼者たちは、巡礼という旅に出るための身支度からはじまる。何千キロにも及ぶ道を、聖地に向かってひたすら歩くのである。日常から移動に必要なものだけを選ぶ作業が求められる。捨てること、選ぶこと、それが旅の出発である。

もともと、巡礼という特別なスタイルはなかったようだ。頑丈で歩きやすい履物と雨や寒さに耐える衣服が必要となる。

中世の書物や残された図像、路傍に設置されているカルヴァリオに刻まれた姿、聖堂のタンパンや円柱に刻まれた姿などからも、おおよその姿を知ることができる。

サン・シェリー・ド・ブラックの橋の袂に設置されているカルヴァリオの台座には、簡素そのものの衣服を着けた巡礼の姿を見ることが出来る。その姿は、頭巾もなく、袖もなく体中をすっぽり覆う丈の長いマント姿である。この衣裳をペルリーヌというが、これ自体ペルラン（巡礼）から発していて興味深い（写真30・31）。



写真30

エステンの十字架像には、鐐が広く水平に張って、縁がまくれ上がった丸い帽子を被り、顎紐でそれを留めている。その正面に巡礼のシンボルマークの帆立貝が付けられていて、一目で巡礼者とわかる。また、体にぴったりした短い上衣（チュンカ）を膝のところで留め、その上に前部が大きく開いたマントを羽織っている姿もある。そして握り部分が丸い巡礼用の杖（ブルトン）と、頭陀袋という二つの携行品は、昔から巡礼者の欠かせない必需品であった。



写真31



写真32

荷物の頭陀袋は、皮製の小さな袋で、特に鹿皮が好んで用いられたが、常にシンボルマークの帆立貝の飾りが付いていた。普通は台形状で、上部より底部の方が幅広で財布の大きさまで小さく折りたたむことができた。この袋は、弁当ともいべきパンを入れる役目もする大切なものである（写真32・33）。

現在では、Tシャツに短パン（夏期）の軽装で歩きやすい軽登山靴姿が多い。凄まじい炎天下にも拘わらず、帽子も冠らず太陽を全身に浴びながら黙々と歩き続けている。背中の子供の大きなザックには必ずミネラルウォーターのボトルが括りつけられている（写真34）。



写真33

ブルトンと呼ばれる杖は、現在のような良い道路事情であるはずもなく、悪路や標高の高い峠など歩行を助けるのに大変有効であり、時には身体の支えにもなったようだ。その長さはさまざまだが、一番上には頭陀袋を掛ける掛け金の付いた握りがあり、下の先端には鉄の石突きが付いていた。貴族の巡礼者が持っていた杖は、金張りの真鍮板で覆われ、帆立貝で細工が施されていた。瓢箪は巡礼者が救護所などでもらった余分なブドウ酒などを中に入れておくのに使われ、身につけたベルトや杖の先にぶらさげることもできた。

このような服装をして、雨や寒さから身を守っ

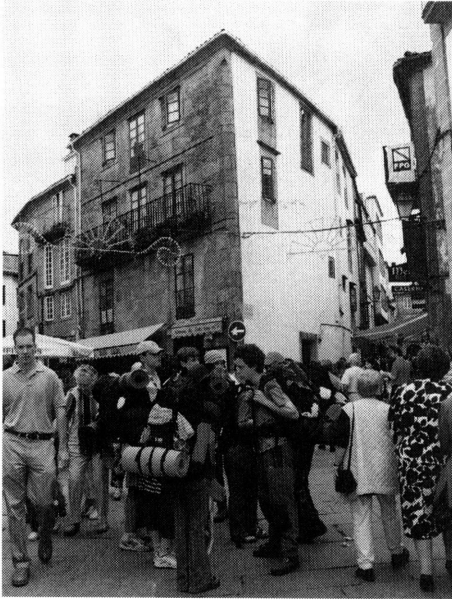


写真34

ていたのである。そのうち、この服装が習慣化され、決まったものとして定着し、聖ヤコブの巡礼者の印となり、通行証の代わりになり、さらには救護所や信者たちから慈善行為を受ける権利を与えられることにもなったのである。

巡礼のたびへの誓いを固め、近親者たちとも離別し、いざ出発の当日は、教区の教会で巡礼杖と頭陀袋の祝福を授かって、旅立つのである。

#### (4) 聖堂、教会

カミーノ・デ・サンチャゴ沿いの町や村には、沢山の聖堂や教会が保存されている。現在でも、その町や村の中心的存在になっている。

過酷な旅を続けてきた巡礼者たちにとって、展望の利く丘の頂や、村の広場に建っている聖堂や

教会の姿は、一種の道標ともなり、人々の恐怖心を取り除き、心の安らぎを与える役目を果たしていたことだろう。強い日差しを避ける、しばしの休息の場ともなった。必要な場合には仮の宿になったり、避難場所にもなった。

現在の巡礼者たちは、クレデンシャルと呼ばれる巡礼手帳（出発地の教会が発行）を持参していてスタンプを押して貰うのも、これらの教会である（写真35）。

11世紀～12世紀頃、盛んに建築されたロマネスク様式の聖堂は、大勢の巡礼者たちが参拝するのに便利なように、特別な様式が生み出された。その最も大きな特徴は、身廊だけでなく、翼廊にも側廊をつけ、さらに内陣後方に側廊につながるように周廊をめぐるして、堂内をぐるりと一巡できる周歩廊を造ったことである。また、出口と入口を別々に造った。このように参

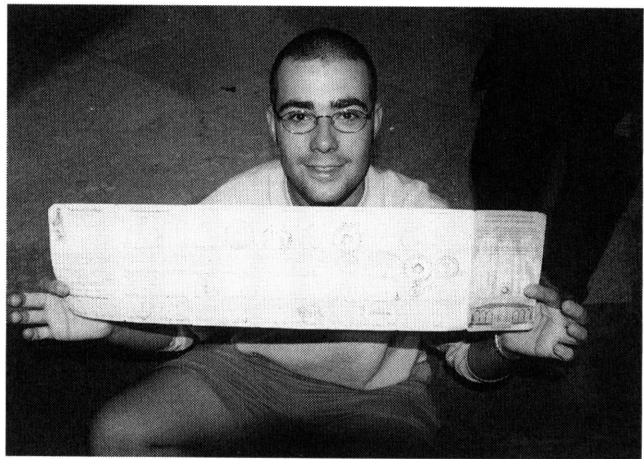


写真35

拝路を一方通行にしておけば、殺到する巡礼者同志がぶつかりあって混乱することもないわけである。また、これらの聖堂や教会は、巡礼者たちの参拝の対象である聖遺物を多数所持していたので、それらを祭るために祭室の周壁に、さらにいくつかの小祭室が放射状に作られてい

る(図1)。

巡礼者たちは、巡拝路に沿って流れるように堂内を一巡して、これらの小祭室をひとつひとつ順番に詣でたのであろう。現在では、一部の祭室部分を博物館や資料室として活用しているところもある。その中には、特に巡礼路や巡礼の歴史を詳細に展示しているものもある。

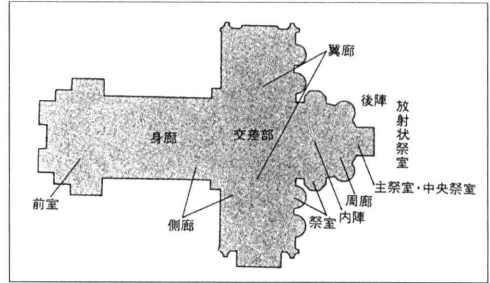


図1 巡礼路教会のプラン  
(ヨーロッパ古寺巡礼・平凡社より転写)

これらロマネスク様式の聖堂のもうひとつの大きな特徴は、そのファサード(建物の前面または正面の全面壁)にある。このファサードには、聖書の物語やキリスト像、聖人像などで全面がびっしり彫刻群で埋め尽くされていて、まるで【建物の聖書】のようである。

今回の調査で見学したファサードの中で、特に彫刻群の素晴らしいものを列記する。

**A) ノートル・ダム・ラ・グランド聖堂(フランス・ボワチエ)**

12世紀初頭に建造された典型的なボワチエ・ロマネスク様式の聖堂である。ファサードは、キリストの受難を中心に素晴らしい彫刻作品が目白押しである。左からアダムとイヴ、四人の預言者たち、受胎告知、幼な児イエスの沐浴なども見られる。次の上段には使徒が並び、もう一つ上には聖人が並ぶ。最上段には、荘嚴のキリストが置かれている。全壁面びっしりすべて彫刻で表現されている(写真36)。

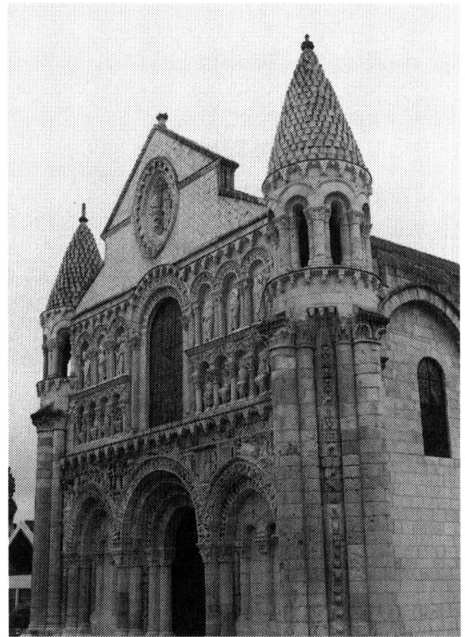


写真36

**B) サント・フォワ聖堂(フランス・コンク)**

11世紀に再建された聖堂であり、方形の二つの塔に挟まれたファサードはオーヴェルニュロマネスク彫刻の傑作で埋め尽くされ、往時の彫刻群がほぼ完全な姿で保存されている。三層からなるタンパン(扉口の上の半円)は、最後の審判を表わしている。中央のキリストの手の動きや、他の人物の姿勢や表情、波模様の表現には斬新さが見られる。向かって左側の細長く三角形となった枠内に、神に向かって幼い聖女フォワのあどけない面差しと、右手をもって神を表わし、その手を彼女に差し出している構図は斬新な表現方法であり、素晴らしい出来映えである。荘嚴な聖堂内を一巡して、矢印に導かれ進むと別棟のコンク博物館の入口につながる。この博物館の目玉は、たくさんの宝石で装飾された黄金の聖女フォワ像である(写真37・38)。

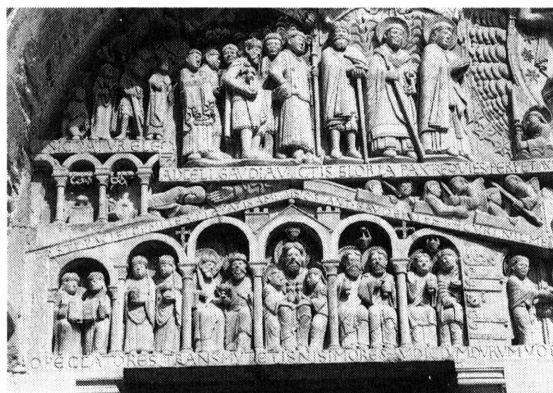


写真37



写真38

### C) サント・マリー聖堂（フランス・オシュ）

ファサードは、特に際立った彫刻が施されていないが、内陣の聖職者席に素晴らしい木彫が施されていて、この部分が一種の資料室として、有料で観覧出来るようになっている。二段になった聖職者席の背持たれ、仕切板、肘掛け、背板、などに見事な彫刻が施されている。フランボワイアン様式の豊穡さがこのルネッサンス様式の作品に残されているのである。後陣回廊には、一連のステンドグラスがあり、ルネッサンス期の傑作といわれる（写真39・40）。



写真39



写真40

### D) サンタ・マリア・ラ・レアル聖堂（スペイン・サングエサ）

この聖堂は車の往來の激しい通りに面し、アラゴン河畔に建っている。レンガ造りの八角形の大きな塔が目印である。南側のポルタイユ（扉口）にはおびただしい彫刻群がひしめき合う

ように施されている。12世紀末から13世紀にかけての建造である。彫刻柱などに、すでにゴシック様式が用いられている。タンパンには、楽を奏する天使たちに囲まれた父なる神が、右側選ばれた人々を迎え入れ、左側は下に下ろして、見放した人々を押し潰している。片隅には魂の重さを計る天使ミカエルの姿がある。アーチ部分には、木靴職人、弦楽器職人、木こりなど目立たない仕事をする人々の姿が刻まれている（写真41）。



写真41

#### E) サンタ・マリア・デ・レグラ聖堂（スペイン・レオン）

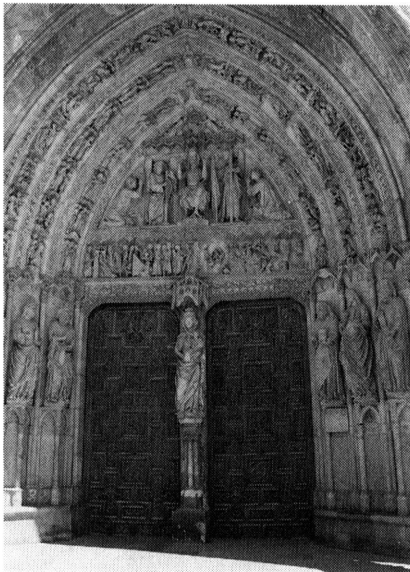


写真42

スペイン・ゴシック三大聖堂の一つ、13～14世紀の建造である。西側正面と南側ファサードは特に素晴らしい彫刻群で埋め尽くされている。正面ファサードには、奥行きが深く贅沢に彫刻が施された三つのポルタイユがあり、中央ポルタイユの上部に穏かな微笑みをたたえた“白い聖母マリア”をいただいている。タンパンには、最後の審判を主題とした彫刻群が施されている。内部の身廊を照らす120枚以上のステンドグラスと三つの巨大なバラ窓は比類ないものである（写真42）。

#### F) アストルガ大聖堂（スペイン・アストルガ）

15世紀から17世紀に建てられたバロックのファサードの見事な彫刻群がバラ色に輝いている。その隣に建つ司祭館は、ガウディの設計で、現在は巡礼路博物館になっている。司教館の壁の色は、地味な灰色で隣接

する大聖堂の色と比較され、建設当初は批判を浴びた。ガウディは、アストルガの町が雪に包まれたとき、それは美しい色彩の調和を生み出すように計算したものだだったという。訪れた日はあいにく休館日に当たり展示物は見学することはできなかったが、司祭館の建物と手入れのゆきとどいた庭園を眺め、ガウディの建築に触れることができた（写真43・44）。

#### G) サンチャゴ・デ・コンポステラ大聖堂（スペイン・サンチャゴ・デ・コンポステラ）

初期ロマネスク建築の集大成ともいえる大聖堂であり、9世紀の初頭、ここに聖ヤコブの遺骨が発見され、その上に教会が建てられたと伝えられる。

この大聖堂は、スペイン・ロマネスク彫刻を代表するファサードの彫刻群をもっている。南側袖廊の扉口は、“金銀細工師の門”といわれている。この扉口は一對になっていて、左右二



写真43



写真44



写真45



写真46

つのタンパンとその上部にはところ狭しとキリストの受難が彫刻されている。

オブラドイロ広場から菱形の階段を登り、西正面のオブラドイロ門を潜ると入口が三つに分かれた“栄光の門”がある。この三つの通路を持つ門の彫刻群は、美しく全体としてのまとまりがある。大聖堂の他のロマネスク様式の部分よりも、少し遅い時期、12世紀末に名匠マテオによって造られたゴシック芸術の性格を帯びたものである。中央の柱には、守護聖人ヤコブが左手に巡礼杖を持って座している。この門を取り巻く沢山の聖人たちの彫像には、彩色が残り、衣の襞の表現、個々の強烈な顔の表現などが実に見事である。人物たちの体の動きが感じられ、背後の柱から像がはみ出していて、より立体に近づいているのがわかる。ロマネスクから次のゴシックへ一歩踏み出している証拠である（写真45・46）。

(5) 宿泊所、救護所

カミーノ・デ・サンチャゴには、巡礼者用のアルベルゲという宿がある(写真47)。救護施設を意味するレフヒオの名で呼ばれることもある。アルベルゲは、ほぼ8~20キロ間隔で巡礼路沿いの村や町に設置されている。これらは教会や修道院の付属施設として、町や村が管理しているもの、個人が運営するものまであって、基本的には無料であるが、寄付金として日本円の500円前後を支払うことになる。アルベルゲは、通常ホスピタレーロと呼ばれるボランティア

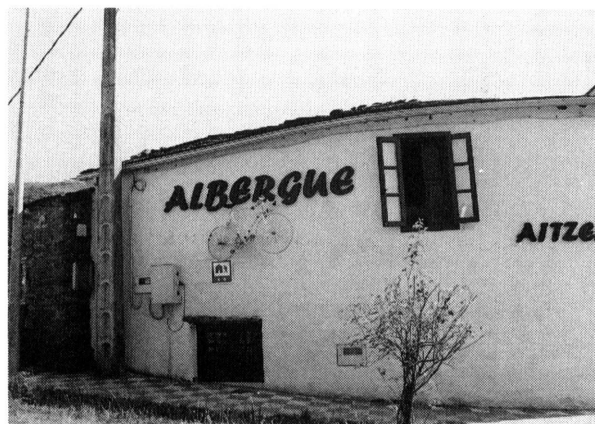


写真47



写真48



写真49

アで働く人々によって支えられている。ホスピタレーロになるには、いくつか条件があるがまず一度はカミーノ・デ・サンチャゴを旅したことがある(写真48)。

巡礼者たちは、安さだけではなく、一晚という短い時間内にこのホスピタレーロに支えられ、様々な情報を得て、次の目的地へと旅立って行くのである。

12世紀の初頭に、フランスの山岳地帯のオーブラックに救護所が建てられた。巡礼者を接遇する施設であると共に貧者や病人たちが看護を受けられるところでもあった。そして、この安らかな場所で永遠の眠りに入ることもできたのである。このことは執念にまでなった巡礼者たちの熱い願いであった(写真49)。

中世の各時代を通じて、この救護所の存在は「道」の管理にも役立ち、巡礼者の安全を見守り周辺の整備をし、山賊などの待ち伏せの危険を防ぐなどの大きな効能もあった。

オーブラックの現在は、教会と礼拝堂だけであるが、1120年建立のロマネスク様式の見事な建築から見ても、村の往時の繁栄ぶりがうかがえる。丘に囲まれ、広大な空間が広が



るこの地に到着した巡礼者たちにとって、しばし苦難の旅から開放されたことであろう。霧の深いこの地を通過していく巡礼者にとって大きな道標の役割も果たしたことであろう。また、毎日のように配給される施しに、この地方全域から貧窮者たちが集ってきたそうである。1523年頃、オーブラック救護所の門前には、毎日“一般の施し”に対して1200～1500人もの人々が押し寄せたという。この人跡稀な地域では信じ難い数字である。施しには『3個の小型パンが与えられた。一人の人間がその日一日生きて行くことが出来、飢えで死なずにすむ量である』と古書「巡礼案内」に記されている。

巡礼路沿いの主な救護所として、スペインでは次の三つが「巡礼案内」にあげられている。

①エステーリャとログローニョの間、ロス・アルコスからすぐのところ。②セブレイロ峠でレオンとガリシアの境界。③サンチャゴ・デ・コンポステーラ大聖堂の北側前庭。その他イラゴ山を越えるアストルガとポンフェラーダの間にもあったそうである。

フランスにおいては、救護を目的とする無数の病院、診療所、療養所、保護施設などがあって、本来の意味での巡礼者のための救護所とは区別することは難しいので列記しにくい。大半の施設は、このどちらの役割も引き受けていた（写真50）。



写真50

中世も終わりの頃には救護所付属の大小多くの礼拝堂が次々に作られた。冬期の山越えの際不幸にも凍死

した人々の仮の納骨堂として用いられた。その例として、ポンスの救護所（トゥールとボワチエの間）があげられる。ここを通る巡礼者たちが、土地の領主ジョフロワ・ド・ポンスに懇願して設置されたものである。建物は道路をまたぐ形になって、下はアーケードになっている。通路の東側に礼拝堂、西側に救護所の戸口が開いている。内部の両壁面には半円形のアーチであり、アーケードの下は巡礼者の休息が出来る場所になっている。石の壁にはくぼみが掘られていて石棺をおさめたり、石のベンチが多く作られていた。やっとたどり着いた巡礼者たちが休息のために腰を下ろしたり、仮眠できるように工夫されていたのである。

聖地に近いトリアカステーラの村に滞在した折、早立ちする巡礼者の杖の音が朝霧に包まれて響いていたのが印象的であった。アルベルゲの中には一冊のノートがおかれ、若者たちのメッセージが沢山残されていた。現在に至るまで、巡礼者たちを支えてきたこれらの施設の歴史を辿ると、中世の生んだ独自の慈善施設の救護所から始まっていることに気付いた。

## 結び

サンチャゴ・デ・コンポステーラはカミーノ・デ・サンチャゴの終着点である。旧市街の西

側の一角にあるサッカーグラウンドほどの石畳のオブラドイロ広場は、東側にバロック様式の美しいファサードを持つ大聖堂がそそりたつ。西側にはルネッサンス様式のラホイ宮殿（現在は市庁舎）、南側はサン・ヘロニモ神学校。そして北側には1489年に創建された巡礼者のために王立病院（現在最高級のパラドール）だった建物に囲まれている。

7月25日はサンチャゴの祭日である。世界各地から、この日を目指して巡礼の長旅を続けてきた人々で町全体が溢れている。当日は混雑を緩和するためか、正面の勝利の門は閉ざされプラテリアス広場に面した金銀細工師の門から堂内に入るようになっていた。巡礼者のみならず観光客も一斉に目的の栄光の門へ向かって足早に進む。栄光の門の三つの入り口の中央支柱にあるヤコブ像の足下に手を差しのべて、聖地への到着を告げるのが慣わしとなっている。何百年もの間、巡礼者たちが手を押し当てた、その箇所が磨り減って指の形にえぐれている。巡礼者に見習い、親指、人差し指と順にくぼみに指を重ねて真似てみる。厳粛な気持ちになってこの儀式を行う。

超満員の堂内に、やっと自分の場所を見つけミサの始まるのを待つ。大きなザックが壁際に積み上げられ、その傍らには、首に大事な巡礼手帳の入った袋を下げた若者たちの姿が目立つ。どの顔も大きな目的を成し遂げた満足感と自信に満ちあふれていた。

長いミサのクライマックスは、ボタフメイロ（巨大な吊り香炉）の儀式である。天井から太いロープで吊られた大香炉に香が焚かれ、翼廊いっぱいには振られる。堂内に香煙でけむり祈る人々を煙が包む。往時の巡礼者たちは、風呂もまともに入れず旅を続けてきたので、汗まみれの悪臭を浄めるために始まったそうであるが、聖堂内に心地よいほのかな香りが残る。

## 参考文献

- 1) レーモン・ウルセル：中世の巡礼者たち 東京 みすず書房 1987
- 2) 米山 智美：スペイン巡礼の道を行く 東京 東京書籍 2002
- 3) 小谷 明・粟津 規雄：スペイン巡礼の道 東京 新潮社 1998
- 4) 小川 国夫：ヨーロッパ古寺巡礼 東京 平凡社 1976